

「シュミットシンポジウム 1982」及び 「光学観測に関連した技術シンポジウム」報告

前 原 英 夫*

去る9月29, 30日, 10月1日の3日間にわたって, 上記の二つのシンポジウムが開催された. 会場は紅葉の時期を真近かにした木曾路の国民宿舎であった. 「シュミットシンポジウム」は木曾での本観測開始以来恒例の行事となり, 今年で数えて6回目である. いっぽう「光学観測に関連した技術シンポジウム」は昨年岡山で開かれたのに続いて2回目ということになる. もともと「シュミット」関係には機器開発も少なからず含まれてきたし, 新しい望遠鏡建設が焦眉の急であることから, 合同で開くことは有益であろうとの判断がなされたわけである.

「シュミットシンポジウム」は従来から単に研究発表だけに止まらず, 望遠鏡・測定機に関する情報交換, 観測プログラムの提案や検討などという, いわばユーザー会議の役割も果たしてきた. 今回も写真乾板の帯出や優先権について話し合いがあり, また報告および討論のテーマとして「シュミット望遠鏡の役割と国際協力」(司会: 小平) および「光学赤外望遠鏡計画」(司会: 小暮, 石田憲) が取り上げられた. しかしながら, 研究発表との関連で時間の制約が大きく, 突っ込んだ議論が行われなかったのは残念であった.

研究発表は種々の分野に及んだが, 座長をお願いした人の名とともに挙げて見ると, 銀河団(藤本光), 銀河(田村・若松), 銀河系(奥田), 星間物質と星雲(西村, 磯部), 太陽系(舞原), データ処理(松本敏)であった. また将来の観測テーマへの模索という意味をこめて, 銀河団形成の理論(富田憲), 赤外・電波での銀河の観測(松本敏, 長谷川哲)についてレビューが行われた. 今後は理論や他の波長域との共同研究を積極的に押し進める必要がある.

いっぽう, 「技術シンポジウム」は光学赤外望遠鏡に

ついでに議論が飛び交う中で, 技術的な側面からのアプローチを考へることが主要な課題であった. 赤外観測の基礎(舞原), 金属鏡と新技術望遠鏡(河野), 3m望遠鏡の観測装置(西村)についてレビューが行われた. 研究発表としては, 赤外観測装置, 岡山・堂平・木曾の望遠鏡と観測装置(座長: 辻村, 清水実, 野口猛)に関するものが相次ぎ, これらの開発が順調に進められていることを窺わせた. 望遠鏡を作るマンパワーは不足しないであろうとの感を強くした.

とにかく今回は87名の参加, 55の講演があり, ミニ年会という感じであった. 各地からお集りいただいた出席者に感謝し, 盛会であったことを嬉しく思っているのが私たちの偽らざる気持であるが, 反省や改善の意見もなかったわけではない. 15分の講演時間は短かすぎた, 種々の議論にもっと時間をさくべきであった, 出席者の予定がつかみきれず十分に世話ができなかった等々. 例えば集録をシンポジウム前に作る, ポスターセッションを設けるなどして, 情報交換や議論に多くの時間を当てるべきだというのが後日の意見の大勢を占めた.

印象記のような報告になってしまったが, 終りに今回の特別講演として昨年10月に世界された廣瀬秀雄先生の追悼講演(高瀬)が行われたことも報告しておきたい. 廣瀬先生のシュミット望遠鏡建設への熱意を聴くにつけ, 大いに見習わなければと思ったのは私一人だけではないであろう.

総合研究A(石田), 総合研究B(山下)からは旅費等の援助を受け, また会場の「ねざめホテル」には種々の便宜を計っていただきました. ここに感謝いたします. なお, 今回の集録は目下準備中ですが, ご希望の方は世話人(石田, 野口, 前原)までご連絡下さい.

* 東京天文台 Hideo Maehara

計 報

本会元評議員, 京都大学理学部助教授 服部 昭氏は
去る昭和57年11月23日脳溢血のため逝去されました.

謹んで御冥福をお祈りするとともに会員諸氏にお知らせ致します.